

書

評

The Quest of the Goddess

David Hawkes

デイヴィッド・ホークス「女神の探求」

古代という世界に觸れてゆくことは、どこか見知らぬ文字を寫すのに似ている。確かにその世界のうちの人びとが共通に了解していたはずの暗黙の事項を知らされぬまま、

不器用に扱わなくてはならないのは、いかにももどかしい。中國でいうならば、先秦とはことに強くそうした印象を与える時代である。著者はこの論文において『楚辭』から漢賦への展開を追跡しつつ、そのもどかしさをやぶるための一つの方法——文學における〈原型 (archetype)〉^(注)の追求——を試みた。

(注) 著者は C. G. Jung の〈Archetypus〉を意識しつつ、^レら
し。

《『楚辭』は、さまざまな傳承の集合體である一方、宗教的な口誦の (religious, oral) 傳承から非宗教的かつ文學的な (secular, literary) それへの轉換をあらわす存在であるという、すべてに共通した特徴によって結ばれている。屈原のめざしたのも、またこの轉換であった。

原初の宗教性を最も色濃くとどめている「九歌」の「湘君」は、男巫が女神を求めつつ獨唱する形式の祭歌と思われる、各々の表現の背後には實際の祭祀儀禮を想定することができる。これら「九歌」が日常的世界に移行したとき、「離騷」は成立した。さきの男巫—女神の關係は、詩人が

配偶者を求めるものへと變化しつつ、そのまま主題としてうけつがれている。その他、直接話法の使用など表現面での巫的痕跡は深い。

「離騷」には、この〈女神の探求〉の主題とともに、さらに重要な〈呪的遊行 (the magic-making journey)〉の主題が現れている。巫的性格の作品を除いて、『楚辭』は *tristia* (騷)、*itineraria* (遊) の二つのカテゴリーにわかれるのだが、このうち〈遊〉は單なる旅程の描寫にとどまるものではない。宇宙を完全に遊行してその各部分を支配する神々のすべてを祭ったとき特別の力を獲得する、という中國の傳統的思想を背景とした、呪的性格をもつものである。その遊行は、現實の行爲であれ幻想上でのものであれかまわなかった。

こうした呪的遊行の思想は、秦の政治的統一のもとに四神・五帝(宇宙の各方位を代表)の觀念と合體し、封禪説を形成する。封禪とは、泰山のみに限られたものではなく、世界を遊行し、その各方位を代表する五岳のすべてを祭ることによりその主となろうとする壯大な祭祀であった。

「遠遊」は封禪説が文學に影響を及ぼした結果であり、その遊行描寫は、「離騷」のそれが漠然としているのにくらべて、方位を意識した曼荼羅的なものになっている。

現實の帝王の遊行、幻想の次元における遊行、兩者がひとたび對應しあい、轉移するとき、本來個人的性格であるはずの『楚辭』は遊行の契機をとおして宮廷に受容され、漢賦への變質を遂げた。しかしながら、「呪的遊行」の主題は、漢賦を通じて生きつづけ、晉代の陸機「文賦」においてもなお認めることができるように、ながく中國の文學に影響を與えつづけた。』

以上がこの論文の概要である。不十分なまとめかたながら、これをお読みいただければ、この論文の方法、面白さといったものはある程度明らかになるとおもふ。と同時に、問題點のおおさかなり目につくのである。ここではそのうち二つ、archetypeとしての「呪的遊行」および屈原をめぐって検討してみたい。

まず「呪的遊行」説であるが、論文中での重要な位置にもかかわらず、著者はこれについての具體的な根據をほと

んど示していない。そのために、たかだか著者の目にそう映ったという程度の意味しか持ちえていないのである。そのうえ、一般に幻想の次元で遊行がおこなわれるとき、そこには何らかの形で「他界」が入りこんでくる、という點が全く見落されてしまっているのだ。「離騷」や『穆天子傳』の遊行は、圓環の完成をめざす過程ではなく、空間的幻想としての「他界」へとむかっている、いわば直線的なものであるし、途上にあらわれる種々の神格も、旅の安全の保障にからんで引きだされいると考えられるのである。

「他界」の特別な意味を見落したことは、封禪をめぐる部分にも尾を引いている。著者はおそらく『尚書』舜典の「五載一巡狩」の記事にみちびかれて新しい封禪解釋を提出したと思われるのだが、もし封禪説が世界を遊行する構造のものであったとするならば、祭るものたちの泰山へのこだわりはどうてい説明しきれないのである。實さい、『史記』封禪書の冒頭に「未有睹符瑞見而不臻乎泰山者也」というのははじめとして、封禪の語があらわれるとき、そこには同時に泰山が思いうかべられている。この重みは、

泰山を五岳の一つとしてしか見ないならば、決して理解できないであろう。後世泰山治鬼の信仰（日知錄三十）が發生したことからわかるように、泰山はもともと特殊な磁場——「他界」との接点——であって、それゆえに封禪の場としてえらばれたのである（福永光司「封禪説の形成」、一九五四—五、「東方宗教」六—七）。

archetypeとしての〈呪的遊行〉のこのようなあいまいさは、恣意的に夾雜物を含んだまま設定されうるといふ、archetype そのものにつきまとう危さを豫感させる。ただ、archetype について正面から論ずるからには持ちあわせていないため、ここでは評價をさしひかえない。

第二の問題點は、著者の『楚辭』觀そのものにかかわっている。『楚辭』について、religious, oral から secular, literary へ、と著者はあっけなく言い切り、その接點に屈原をたたせてみせるのだ。しかし、oral ということばをげんみつな意味 (cf. Lord, A.: *The Singer of Tales*, 1964) でもちいるならば、literary への轉換は、ある個人によつてなしとげられるような、そんなにたやすいことではない

はずなのである。religious から secular のばあいにしてかわりはない。著者は王逸の九歌序に誘導されて、屈原のなかにすべてを解消したまま通りすぎていこうとするのだ。別の言いかたをするなら、傳統的屈原像と新しい『楚辭』解釋が同棲するままにしているのである。

このような屈原をおきざりにしたままの『楚辭』解釋は、それが新しいものであればあるだけあぶない。なぜなら、屈原の性格をさだめることは、『楚辭』の質、あるいは傳承者の把握にじかにかかわっているからである。その意味で、屈原をさける著者の態度は肯うことができない。

ついでながら觸れておくと、屈原について、わが國においては岡村繁氏・小南一郎氏などの、『楚辭』と一たび斷ち切ろうとする立場があり、従来の屈原觀は再檢討されねばならない段階に至っている。反面、屈原と『楚辭』傳承者の關係について、いまだ充分な考察はなされていない。さらには、もし『楚辭』と屈原のあいだに隔たりをおくことが許されるならば、逆に、なぜ兩者が合體しえたのか、なぜ屈原のカリスマ化がなされたのか、という地點にま

で踏みこんだ研究も、今後はたされなくてはならないであろう。

著者のこの論文は、たしかに缺陷がおおく、論證も緻密とはいえない。したがって、ここで出された結論そのものを利用するには、かなり慎重になる必要がある。その一方で、至るところでの新しい着眼、示唆のゆたかさをもつすぐれた論文であるといつてよい。なお、福永光司氏の『大入賦』の思想的系譜（一九七〇、「東方學報」京都41冊）は、この論文とほぼ同一の作品を別の角度からさぐったものであり、参照が望まれる。

一九六七年六月に、著者は京都大學文學部において、この論文と重なる内容の講演をおこなっている。そのおりの英文要旨を貸與いただいた井波律子先生、本稿執筆にあたり細かく助言をいただいた小南一郎先生に深く感謝したい。

Asia Major, New Ser. vol. XIII, Parts 1-2, 1967 に初出。

『英美學人論中國古典文學』（一九七三香港中文大學）に、黃兆傑氏の中國語譯「求宓妃之所在」をおさめる。

（京都大學 平田昌司）